

中医学用語

(修訂 2007.1.24) 禁転載

あ行

陰陽学説 (いんようがくせつ)

陰陽は事物を概括する二種の属性である。それは古代人が長期間に及ぶ生活実践の中から、自然界の事物の変化は皆陰陽の対立と統一の両面を備えているということを知ったということである。この二面の内在の関連、相互作用、不断の運動が、事物の成長や変化や消亡の根源である。

『素問・陰陽応象大論』では「陽明者、天地之道也。万物之綱紀、変化之父母、生殺之本始、神明之府也」(陰陽なるもの天地の道なり。万物の規律、変化の父母、生殺の本始、神明の府なり)という。これは一切の事物の発生や発展を、陰陽の変化で解説し認識している。

『素問・生氣通天論』:「陰平陽秘、精神乃治、陰陽離決、精氣乃絶」(陰陽のバランスが整うと精神が治まり、陰陽のバランスが狂うと精気が絶える。)このように自然な陰陽学説は、人体の病理現象の認識や分析や概括にも応用され、これによって病状を弁明し治療の原則を決定した。

温法 (おんぽう)

温中祛寒・回陽通絡などの作用を通して寒邪を追い出し、陽気を回復させ、経絡を通じさせ、血脈を調和する、寒邪による臓腑経絡が病に中りに対する一種の治法である。『素問・至真要大論』は「寒なる者は之を熱す」という。これは温法の理論根拠の一つである。

か行

鍼灸甲乙経 (しんきゅうこうおつけい)

皇甫謐は (AD 215 ~ 282年)、祖母に教養され二十歳の時発憤し勉強し、経史各

家の全てを研究しており著述が多い。針灸学の分野では彼は『素問』・『針経』・『明堂孔穴針灸治要』の三書の精華を吸収し、秦漢三国時代以後の針灸学の成果を総括し、また自分の臨床経験を結合して、現存している最古の針灸専門書である『黄帝三部針灸甲乙経』（『針灸甲乙経』と略称する）を著わした。書中に人体の生理や病理変化を述べており、当時の腧穴の総数と部位を改訂し、針灸の操作方法を詳細に紹介し、また各種の適応症を臨床の必要から排列している。この書物は晋時代以前の経験を総括しており、後世の針灸学の発展に大きな影響を与えた。晋時代から宋時代まで有名な針灸の著作は基本的には『甲乙経』の基礎の上に書かれたものである。

経絡（けいらく）

経絡は人体の気血を運行させる通路であり、表裏上下を疎通し、臓腑器官に連係する系統的な組織である。例えば臓腑が病変を発生すると、常に経絡を通じて皮膚の腧穴に反映する。そこで関係のある腧穴に針灸か推拿して、臓腑の病変を治癒したり緩和したり支配したりできるのである。経絡学説の発展は、針灸と推拿と密接に関係している。

五行学説（ごぎょうがくせつ）

五行は、古代人が当時の日常生活に用いた最も熟知した物質である。木火土金水がその代表であり、またこの五種の中の相互援助と相互制約の関係で、事物の複雑な変化を解明している。

五行学説の重要な点は、相生と相克とで事物の相互関係を説明していることである。五行の相生相克は、事物の発展過程にあって不可分の二つの面であり、「生」がなければ事物の発生と成長がなく、「克」がないと協調関係の下に変化と発展を維持することができなくなる。このため生の中に克があり、克の中に生がある。相反して相成って、このようにして始めて事物の内部や事物の間に相対的な平衡が保持され、絶えず発展することができるのである。

『内経』は五行の相生相克の法則を運用し、人体各部の関連と、人体と自然環境との関係を解明している。生理の面では、五行を五臓に配当し、臓腑のお互いの活動の間に、援助だけでなく相制約する関係があることを説明している。病理の面では、生・克・乗・侮の法則で疾病の伝変の関係を説明している。治療の面では、五行の相生相克の関係に基づいて弁証立方を指導し、具体的な治療方法を確定する。例えば「虚則補其母、実則瀉其子」（虚であればその母を補い、実であればその子を瀉する。）という。これが五行学説の理論の治療への具体的な運用法である。

さ行

証（しょう）：

生命体の疾病の発展過程における、ある段階の病理の概括である。それは病変の部位、

原因、性質及び正邪関係を包括し、疾病の発展の過程での、ある段階の病理変化の本質を反映しているため、症状に比べ、より全面的であり、より深刻且つ正確に疾病の本質を示している。

神（しん）：

広義では人体生命活動の外在表現を指すが、狭義では精神意識思惟活動を指す。

神農（しんのう）：

母系氏族社会後期には、原始農業や牧畜業がかなりの規模に発展した。狩猟や多数の動物の飼育、耕地の開墾、田畑の灌漑などの労働を行うのに男子は女子にくらべて一層重要になり、これにつれて父兄氏族社会に進んだ。即ち伝説の中の神農氏の時代である。

『周易・繫辞』：「神農氏作こる。木を切つて耜をなり、木を揉めて耒を為り、耒もて耨きるの利を、天下に教う」と記載されている。

『淮南子・修務訓』：「神農は…百草の滋味、水泉の甘苦を嘗め、民に避就する所を知らしむ。この時に当たり、一日に七十毒に遭う」

推拿医学（すいなきがく）（Chinese Tuina Manual Medicine）

中医基礎理論に基づき、人体の体表の経絡・穴や、患部にある筋肉・靭帯・関節などに、種々の推拿手技を用いて、疾病を治療・予防する、中医外治法の一つであり、かつその臨床応用と治療原理を研究する中医学の重要な一学問である。

推拿麻酔（すいなますい）

1960年代の初・中期以来、「中西医結合」の指導思想に基づき、政府の「扶助中医」・「発展中医」の画期的な中医政策によって、多くの流派・経験を推拿に活かし、その手法と適応疾患の種類をかなり豊富にすることができた。民間では、推拿指圧法による無麻酔抜歯の経験をまとめられ、ハりに「移植」されたことによって、やがてハリ麻酔は誕生された。また、ハリ麻酔が盛んになったおかげで、推拿も鎮痛抜歯より手術に用いられるのではないかという発想から、推拿麻酔が生み出され、甲状腺切除、帝王切開、胃の切除、妊娠中絶等十数種類の手術にこれが応用された。

正骨八法（せいこつはっぽう）

乾隆年間に清朝廷が編著した『医宗金鑑・正骨心法要旨』の中に、骨関節と軟部組織損傷に対する推拿方法が記されている。「摸（も）・接（せつ）・端（たん）・提（てい）・按・摩・推・拿」の推拿手技「正骨八法」を比較的詳細に記述し、整筋手技と整骨手技の両サイドから推拿手技の臨床応用をいっそう発展させた。

臓（ぞう）

五臓であり、肝、心、脾、肺、腎を包括する。五臓の主要な効用は「臓精気且不瀉也、

故満且不能実」(臓は精気を蔵し瀉せず、故に満ちて実せず。)(『素問・五臓別論』)である。

た行

中医学(ちゅういがく)

人体の生理、病理及び疾病の診断、予防、治療を研究する一つの科学である。それは独特な理論体系と豊富な臨床経験を持っている。中医学の理論体系は古代の唯物論と弁証法思想である陰陽学説に深く影響され、整体観念を主導的な思想とし、臓腑、経絡の生理と病理を基礎とし、弁証論治を診療の特徴とする医学理論体系である。

通法(つうほう)

疏経通絡の作用を通して、経絡不通による病証を治すものである。従って、通法で治療できる病証は病が臓腑・経絡・筋肉の間にあるものである。

東洋医学(とうよういがく):

古代中国人のすぐれた思想、哲学、科学、自然観を基に生み出され、長年にわたる経験の中で体系付けた医学であり、中国大陸を中心に発達発展したものである。

ま行

脈経(みやくきょう)

晋時代になると、王叔和が脈法に関係のある資料を探し集め、各家の説を取り入れ、また自分の臨床経験を結合して『脈経』十巻を著わした。

その中で王叔和はまず脈理を解説し、脈診部位と脈象の弁別方法を説明し、また各種の脈象を帰納して二十四種(浮・洪・滑・数・促・弦・緊・沈・伏・革・実・微・洪・細・軟・弱・虚・散・緩・遅・結・代・動)とした。同時にまた類似の脈象を一緒に排列し、対比を加えており理解に便利である。次に脈理を巡って各種の脈象の形状、及び主とする症候を分別解説し、また望診や聞診などを結び付けて研究している。

このほか著者は、扁鵲・華佗・張仲景などの脈法に関する論述にそれぞれ整理を加え、多くの貴重な医学文献を取り入れた。医者への脈診時に注意しなければならない問題も、はっきり記載している。このため後世の医家は、脈学の分野の初期の総括的な著作として、この書物を崇めている。

は行

腑（ふ）

六腑であり、胆、胃、大腸、小腸、膀胱、三焦である。その主な効用は「物を伝化して蔵せず、故に実して満できず。」（『素問・五臓別論』）である。

伏羲（ふくぎ）

伏羲氏の時代では、人類は「原始共同体」から氏族社会の時代に進み、人々は採集、狩猟、魚撈の生活を通過して定住を始めた。この時期には狩猟、漁撈の道具が発明されており、道具を製造する技術はすでに顕著に向上し、それに伴い生産力も向上していた。男女の生活や出産も社会の発展にしたがって、次第に変化し、ついに「伏羲氏」の民に嫁娶を教えるという伝説の時代になる。この後婚姻制度も変化し、次第に群婚制から対偶婚制に移行し、人類の健康と繁殖を促進した。このため婦人の氏族中における地位は次第に向上し、そこから母系氏族社会を形成した。

扶正祛邪（ふせいきょじゃ）

疾病の経過は、邪正の関係から言えば、正気と邪気の相互闘争の過程である。邪正闘争の勝負は疾病の進展の如何を決定することになる。邪が正に勝つと病は進行し、正が邪に勝つと病は治る。それゆえ、疾病を治療するには、正気を扶助し、邪気を除去しなければならない。これによって邪正双方の力の比を変えて、疾病を治癒の方向に転化させるのである。

弁証（べんしょう）

四診（望、聞、問、切）によって、収集した疾病についての各種の情報を分析し、総合して疾病の部位、原因、性質及び邪正の関係を見分け、概括して、ある性質の証を判断することである。

弁証法（べんしょうほう）

事物が発展していくなかで、それ自体の中に自己を否定する内部矛盾が発展し、やがてより高次の総会へと進展してゆくとする見方。

弁証論治（べんしょうろんち）

中医学における疾病認識と疾病治療の基本原則であり、中医学の疾病に対する一種独特な研究と処理法である。同時に中医学の基本的な特徴の一つとなっている。

『本草経集注』（ほんぞうきょうしゅうちゅう）

陶弘景（452～536年）、字は通明。晩年は華陽の隠居と号した。梁代の丹陽秣陵（いまの江蘇省句容県）の人。彼は『神農本草経』の所載の薬物を整理作業し、新しい用

途や違った記載を捜し集め、関係のある項目の下に注を補充した。また新薬であって『神農本草経』にまだ採用されていない薬物を取り上げ、整理して三百六十五種を採用した。これは『神農本草経』を承けて最初に行われた薬物学の整理向上であり、薬物の品種は一挙に三百六十五種の倍に増加し、七百三十種となった。